

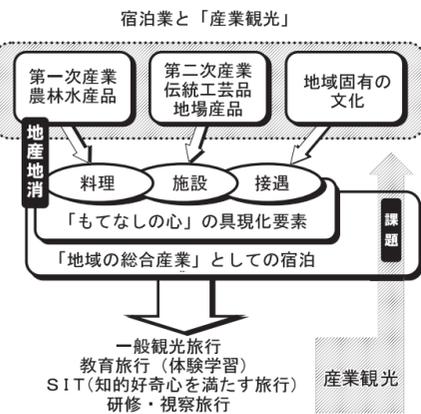
観光立国 変化への挑戦

言葉としての「産業観光」は、最近になって注目されはじめた感も否めないが、設視察に便宜を与える」と四半世紀近く前の84年に刊行された「現代観光用語辞典(日本交通公社刊)にすでに収録されている。解説文章に当時の時代背景が感じられるものの、定義として納得させられる。概要を紹介してみよう。

産業観光とは

それによると、「特色のある漁港景観や農耕景観など、特殊な産業景観を対象とした観光」として、産業観光と呼ぶこともあるが、一般的に「産業観光」と呼ぶことは、産業施設や製品の生産過程を見学する、一種の社会光の姿を示している。

産業観光へ期待と課題

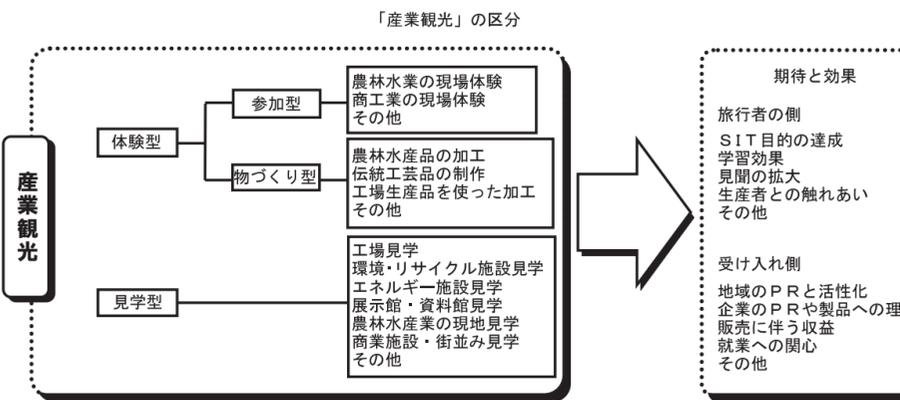


旅館業のポジション

産業観光の中で農林水産業や伝統工芸にかかわるジャンルは、地域の魅力を再発見させる要素がある。言い換えれば、一次産業、二次産業の生産現場が、観光客を誘引する観光資源にもなる。また、日観連・



た、旅行の形態や目的を問わず観光旅行客が宿泊する旅館は、「地域の魅力を再発見させる要素としての側面を持つている。旅館の構成要素は、日観連・



国観連などの誕生した戦後間もない昭和20年代から「清潔・安全・快適」とともに、実際の経営場面で「施設・料理・サービス(接客)の三要素」と言われ続け、それは現在も変わらぬ。これらの構成要素を個別にとらえると、料理は地域の第一次産業が生み出す食材を調理したものであり、それはスローフードなどにもつながる。これらが組み合わせられて旅館の「もてなしの

多様な可能性に期待つづける

一般化している農林水産業の現場体験などがある。代表的なものを列挙すると、農業ではイチゴやブドウ、ミカン狩りをはじめ、観光農園の名で定着しているものだけでなく、学校単位で地方へ出向いて行われる田植え、除草、稲刈り、芋掘りなどさまざまな農作業に参加する形がある。林業では教育旅行やボランティアでの間伐や下草刈り、漁業では定置網漁の漁船同乗のほか観光としての地引網漁などもある。また、教育旅行としての木工体験なども参加型と位置づけられる。

もつくり型は、一次製品の加工や二次製品を使った加工などで、食品類で多くみられる。穀類を使ったそばやうどん打ち、餅つき、果実類ではジャムやケーキづくり、魚類ではイクラやカマボコの製造など多様なコ。食品以外では各種の伝統工芸品、陶芸、木工

期待と効果
旅行者の側
SIT目的の達成
学習効果の拡大
見聞の拡大
生産者との触れあい
その他
受け入れ側
地域のPRや活性化
企業に伴う収益
販売への関心
その他

きな位置を占めることが現実視される現在、旅館は地域の総合産業の立場を生かした産業観光の「情報発信ハブステーション」の道を探ることが欠かせない。それは、生産者と地域への貢献だけでなく、旅館自身のステータスを高める意味合いもある。

本来的に企業PRが目的の製品展示館や資料館なども、産業観光施設として改めて注目されている。さらに、元々専門業者の取引の場であった卸売市場なども、産業観光施設として開放され始めている。

また、受け入れ側では地域の魅力をアピールすることで、地域活性化にもつながる。同様に企業でも、企業自体のイメージアップや製品PR、あるいは消費者のニーズの把握などにもつながる。また即売による収益だけでなく、長期的視野に立てば地域や企業の魅力を伝えることで就職・就労に結びつける効果も期待できる。

多様な可能性を秘めた「産業観光」が注目されている。かつて、技術観光として取り組まれてきた工場視察とは異なり、農林水産の第一次産業から最新の環境や省エネ分野まで幅広い産業活動の現場が観光客の誘致につながる。それは、観光へのニーズが多様化し、さらに特化する中であって、国内観光はもとより、インバウンドにおいても効果的な要素になり得る。そこで、産業観光への期待を込めながら、課題を整理してみた。

「二〇数年「産業観光」の言葉が多用されるようになってきた。要因の一つとして「観光立国」への取り組みが挙げられる。また、「住んでよし、訪れてよしの国づくり」を掲げた観光立国行動計画では、①日本の魅力・地域の魅力の確立 ②日本ブランドの海外への発信 ③観光立国に向けた環境整備 ④円滑な訪日客を支える環境整備などが示されており、それらへ呼応する現象と指摘する観光関係者がいる。とりわけ「観光立国」と日本ブランドの「海外への発信」は、短絡とい

えないまでも、欧米で来といった日本の社会構造の変化、「20世紀はモノ」の時代、21世紀は「ココロ」の時代」といった日本の人自身の内的変化など、21世紀の日本と日本人の方向性としてとらえる識者もいる。

いわば、言葉の解釈で百家争鳴ともいえるのが現状の一端を垣間見せている。言葉が多用される現実化される一方で、「観光産業」の定義づけ

で行われてきた。東北の造り酒屋では「本業は酒造りだが、旅行ブームに造りだから酒造り見学の」となる。産業観光の実態を整理するには、形態と目的を区分してとらえる必要がある。形態としては体験型と見学型に大別でき

このうち参加型は、教育旅行の分野ですでに「こちらも枚挙にいとまがない。さらに食品メーカーなどが実施している料理体験教室なども、加工という点ではものづくりの1つに加えられる。

一方、見学型は従来の工場見学に代表される。ビール工場や酒蔵、ワイナリーなどでの試飲は、産業観光ならではの楽しみとして広く親しまれている。同種のものとして食品工場での試食もあ

期待できる。例えば、社会人のSIT(好奇心を満たす旅行)、児童生徒の教育旅行における学習効果、さらに生産者と接することで満たされる充足感などが旅行者の側に生まれる。

また、受け入れ側では地域の魅力をアピールすることで、地域活性化にもつながる。同様に企業でも、企業自体のイメージアップや製品PR、あるいは消費者のニーズの把握などにもつながる。また即売による収益だけでなく、長期的視野に立てば地域や企業の魅力を伝えることで就職・就労に結びつける効果も期待できる。

「観光立国」支える資源